

太宰府の文化財

396

浦ノ田遺跡

—中世墓地の様相—

浦ノ田遺跡は太宰府天満宮境内の丘陵にあった遺跡です。九州国立博物館に通じるエスカレーター設置場所に当たったため、福岡県教育委員会により発掘調査が行われました。



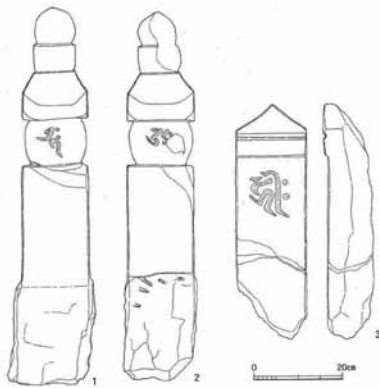
発掘当時の墓地の様子（九州歴史資料館 画像提供）

調査成果によると、丘陵の北斜面に方形石組み区画があり、20カ所で

石塔群とそれに伴う穴が発見されました。この穴からは、葬送儀礼に使われたと考えられる土師器の皿（素焼きの皿）や、火葬骨を納めた蔵骨器としての古瀬戸（愛知県尾張地方



左から一石五輪塔2基と板碑1基（移築後）



一石五輪塔と板碑の実測図
（報告書『浦ノ田Ⅳ』から引用）

の焼き物）、中国産の陶磁器、銅製の筒型容器などが見つかりました。これらの墓は、出土遺物の時期から鎌倉時代後半～室町時代（13世紀後半～14世紀）に作られたものです。蔵骨器を埋めた上には、五輪塔（密教の五大〈空・風・火・水・地〉を表している石塔）や板碑（板状の石に種字〈仏を表す文字〉や仏の像等を彫ったもの）などを建てています。五輪塔は空風輪、火輪などの個別の石材を組み合わせて作るタイプが多いのですが、この墓地で出土した五輪塔の中には一石五輪塔と呼ばれる1つの石を彫りこんで形を作るものがあり、それらは地輪（土台になる四角形の石）が縦に長いという特

徴があります。この一石五輪塔は砂岩製で2つ並んで建てられており、水輪部に彫られた種字はバク（釈迦如来）と、タラク（宝生如来）です。この遺跡がある場所は、天満宮安楽寺（現在の太宰府天満宮）の境内であり、天満宮安楽寺に関係した人々が葬られている可能性がります。中世における天満宮安楽寺の周辺景観を考えるうえで重要な遺跡であり、当時の墓制を良好に表す資料といえます。

また遺跡が立地する同じ丘陵の東600m付近には、焼けた土坑が発掘調査で多数見つかっており、ほかの事例から火葬施設と考えられています。推論になりますが、それらの焼けた土坑で茶毘に付された骨は、この浦ノ田遺跡の墓に葬られたものかもしれません。

発掘された墓地から保存状態のよい3つ石塔群を、九州国立博物館の敷地（天満宮からエスカレーターで抜けた左手側斜面）に移築・復元をしています。野外展示のためいつでも見ることが出来ます。九州国立博物館や太宰府天満宮に来られた際はぜひ訪れてみてください。

文化財課 高橋 学